

関西大学博物館実習展（講評）

日程 2019年11月10日（日）～11月15日（金）10時～16時

場所 関西大学博物館特別展示室（簡文館内）

稲垣足穂展～イナガキタルホ×∞～

- 着目点、内容共に面白く、伝えたいことが伝わる展示だった。明朝体にこだわったとのことだが、図録が読みにくいのが唯一の欠点。目録は見やすいのに。
- 稲垣足穂の影響を最初のパネルで概説すべき。全体の流れが理解しやすい。
- この展示を見て稲垣足穂がどんな人か理解できたかという点、まったくわからないまま。キャプションの色や図録に紺色を使っている意図もよくわからない。文字の色が白だと見にくい。
最後に影響を受けた作家の作品が並んでいるが、足穂がどんな人物かがそこまで理解できなかったため、これらの作品の意図もわからない。
- ・展示構成、流れがある。常時人だかりがあった（熱狂的なファン）。
・図録と展示を連携もたせて好感がもてる。
・関学初等科（何があったか）同期の学生は？
・ポスター：導入の看板、しわが気になる。図録：デザインにこりすぎ、かえって見にくい。
- デイスプレイや展示のおさまりは良い。朗読会を催したい。
- 極めて限定的な内容に絞っており、展示テーマとしては成功。ただし展示したいものが無形のものなので、展示としては難しい部分がある。文字が細く、読みにくいのが難点。
- キャプションは読みやすい。図録の文字が読み難い。M朝では見えない。何故キャプションと同じ字体にしなかったのか。
- スライドファイルの展示を工夫。
- 解説文の長さが統一されていない。
- ・年表等西暦を基本としているので、あいさつ文も「令和」でなく西暦にすべき。
・ご本人のポートレートの写真、画素あらず。
・図録、地の色を濃くするのなら、文字もう少し太くする。
・キャプションのデザインはとても良い。
・壁面のパネルをとめるピンが大きすぎて、そこに目が行く。
・本物と複製が混在している。パネル展示の場合は明記すべき。
・展示キャプションには番号があるが、目録と図録にはなくわかりにくい。
- 足穂への思いが感じられる展示だったと思います。ポスター、キャプションのデザインも凝っていて良いと思いました。ただ、白抜き文字のあつかいをもう少し考えればよかったように思います。

- ・きれいな図録だが、文字が少々読みにくい。フォント or ウェイトの調整が必要か。
- ・ポスターに日時等は不要？
- ・「モノ」がないテーマなので難しいが、絵画や初版本は面白い。
- ・×∞←この意味は？
- ・一度展示を見ただけでは展示の意図が伝わらないのではないか。
- ・作品解説が少なく、タルホの作品、人柄等の魅力を伝えようとする努力が足りないと思う。生い立ち、作家になるまでの道のりなどの掘り下げ（どこかの本に書かれている内容をまとめたような）
例えば、同時代に生きた作家たちと比べて、タルホの作品がどうであったのかという展示方法もあるのではないか。
- ・世界観 目には楽しい
- (図録) 【良くない点】 ①字を白で抜いているが、字が細いため読みにくい。特に P.14、15 の下段。②行間が狭い。← P.17は改行もなく読みづらい。③ふりがなの付け方の不統一。
【良い点】 ①図録として読みごたえがあった。インタビューや寄稿文もあり、面白かった。②写真と説明が一致していてよい。← P.11下の2点はもう少し大きい方がよい。
(展示) 各展示ケースがテーマにそって作られており、統一感があって良かった。展示物の配置にも工夫がなされており、興味深かった。あれだけのものを集めて展示するのは大変だと思うので、真剣にとりくんだと感じた。ただ、展示の配置の意図は解説してもらって初めてわかったので、解説者がいない場合は伝わるのかどうかと思った。足穂のことを全く知らなかったので、フレーズをまとめたところは、足穂のことを知る上で面白かった。
- ・多くの作品から足穂のもつ独特の世界観とその後の影響を再現し、小説にとどまらない足穂の創作・アートの魅力に迫ろうとするところは興味深かった。
- ・ただし、3つの班のなかで一番美術的な要素が大きいのか、モノに語らせようとする姿勢がやや強く、展示全体のコンセプトやそこにおける各作品の位置づけに関する説明が弱いように感じた。班員の口頭による解説がなくても、展示をみただけでも観覧者に理解できるよう、パネル等での説明にいささか工夫がほしかった。
- ・個人的に足穂という人物を知らず、事前に図録を読んで展示を見たが、やはり最後までよく分からなかった。ただし、好きな人は好き、ということが伺える展示だと思った。
- ・全編白抜き文字の図録は、過去の実習展の図録でも例がないと思う。ただし、白抜きであるため、ベースの濃紺の色に負けて文章が読みにくい所もあった。太字にするか、字体を変えるなど、工夫したらよかった。写真は適正に撮影できている。天体に関心が強かった足穂にちなみ、星空をイメージした凝ったデザインの図録である。展示のキャプションも同様に、よくデザインされている。
- ・ポスターのデザインはよいが、パネルに貼るとき、シワができています。会期等、ポスターに盛り込むべき情報が入っておらず、ポスターの役目を果たしていない。
- ポスター：デザインが良い。タイトルも目立っている。見た目から、面白そうな展示という印象を受ける。

図録：デザインはポスターともリンクしていて良い。配置などはばらばら感があるが、文章

自体は読みやすく、ちゃんと練られているのがわかる。デザイン性のある図録にしようというのはわかるが、背景の色で全体的に見にくくなっている。項目ごとに文字の大きさを変えるのはいいが、統一すべき。

展示：人物を紹介する展示とはいえ、感性や世界観という抽象的なものを扱う展示なので、物をテーマとする展示よりはむずかしいが、その意味では意欲的な企画である。小規模なりに足穂という人が紹介できて、よくできていると思う。

たけがたり～今日／京に生きる竹工芸～

- 細川秀章の作品に着目して竹をテーマにした、とのことだったが、そのことが伝わらない。作品は竹工作の例のように見える。展示、解説は無難だが、図録に協力者が載っていない、致命的ミス。
- 情報量が多くおもしろいが、前近代の産業としての在り方への配慮がほしい。アジアのなかの竹文化といった視点も重要。年代の書き方、平成時代は？
- 図録がオープンに間に合わず。
ブロックごとに分担して展示しているので統一感がない。キャプションもルビがない、文字が小さいなど見る人に不親切な展示。他のブースの説明ができなかった。
京都の地図の中央の右枠の意味が不明。平安京の条坊だとすると、中に載っている寺院の時代と合わない。
- ・展示映えのする構成。
・しかし点数が多すぎるか？（軸・茶道具・本）一ヶ所に苦しい。
・竹細工の全国分布（アジアとの関係）
・現在の竹林状況。関大の竹を使って何か？
- 大きなテーマを掲げすぎて散漫になった展示品をセレクトして、もっとフォーカスを効かせてほしい。
Openに間に合わなかったのは大失敗。
- 竹文化全体の扱い方が難しい。個別地域の竹細工なら解りやすいが、全体的な内容と京都に固執した理由がよくわからない。
解説の文字数、フォーマットの設計が不十分。
- 説明が長すぎる。図録の写真が小さい。キャプションの字を小さくした方が良い。
- 京の近代産業、竹の展示、ぎっしり感。
竹ヒゴ作り、工程ごとに道具と竹をセットにするなど演出。
内藤湖南、茶道の歴史、机・畳とのバランスを整え、群として動きを出す。
箆形土器の見せ方。
- 図録の写真が小さく、文章が多い。まったく解説のないキャプションがある。
- ・あいさつキャプションが小さすぎる。
・翻刻された本の展示が多いが書誌情報が欠けている。
・内藤湖南のキャプションが作品にかかっている。壁面章キャプション全てもう少し上にすると見やすい。

- 各人の解説力はすごいが、その内容が展示だけではわからない。解説用のキャプションを要所要所に作るべき。
- 二次資料の本が多すぎる。その内容を活かしたキャプションを作ればよいこと。そうすれば展示スペースにゆとりができる。→展示品が多すぎるので減らす努力を。
- ポスターはあっさりしていて、印象はよいのですが、力強さ、訴える力に欠けるようです。活字刊本の展示が多いのはいただけません。展示資料の再考が必要だったと思います。湖南のコーナーが異質に感じられました。
- • タイトルのコンセプトは？「たけがたり」は造語と思えるので何か説明があってもいいのでは？
 - 図録の文字の大きさはそろえた方がよい。←「ケース」ごとの目次はあまり見ない…。
 - 展示物はとても美しく、眼に楽しい。
- 全体の構成がわかりにくく、特に第3章と第4章のつながりが不明である。

「竹籠ができるまで」の展示では竹ヒゴ作りで終わっており、どのように編んでいくのか、また現代工芸の作品には明らかに現代の技法による部分が見受けられるが、伝統的技法との関係などは説明がない。そもそも展示している竹ヒゴを作る道具は細川氏が現在も使っている道具なのか？
- (図録)【良くない点】①協力者・機関が書かれていない。②1ページの中に様々な文字種、大きさがあり、読みにくい。資料名と法量の文字の大きさが同じなものには違和感がある。③文章が多い。書籍の著者の説明は不要。P.7の京都名所案内図などには竹に関する説明がない。

【良い点】P.10-11の竹選び、竹籠ができるまでは写真があり、わかりやすかった。

(展示)【良くない点】①冒頭部分のキャプションと展示物の位置がずれている。②竹製の茶杓を展示しているが、今回の竹の展示としては節をみせた方がよい(茶碗を外す)。←図録で仕込み茶碗の形で載せた意図がわからない。

【良い点】①図録の説明よりも展示のキャプションの方が、より竹を中心に書いていてわかりやすい。②現代作家の作品の展示によって、新たな挑戦もして面白かった。目にふれることの少ない竹工芸を人々にみせることができたのは、良い企画・展示であったと思う。
- • 展示の流れは比較的分かりやすく、茶書や名所図会などの文献からも人々と竹の関わりがうかがえた。竹ひごに実際に触れて感じることも効果的であった。
 - ただし、実際の展示における解説と図録の内容との間にずれがみられた。たとえば、展示では、各種の文献から竹のさまざまな使われ方が説明されるのに対し、図録では、文献それぞれ自体の説明に終始している(文献にみえる竹の使われ方等の説明がない)。
 - 竹と人々との関わりをめぐる歴史的な前半部分と、実際に竹から籠などがつくられていく後半部分とのつながり、あるいは、後半部分のうち、竹ひご類のパートと現代作家による完成した籠類のパートとのつながりに、ややわかりにくいところ(断絶)があった。
- • 京都を中心にした竹工芸を、竹の種類や歴史、内藤湖南コレクション、竹工芸の製作過程、現代名工の作品と網羅的に取り扱っている。特に、現代作家の作品は、とても美しく、魅了された。

- 図録も網羅的に記述がなされている。写真撮影、図版のサイズは適切である。
 - 展示ケース1つを製作過程の説明に充てているのは、ストーリーとして理解できるが、竹ひご作りの下ごしらえ段階で終わってしまっている。あとの工程のパネルも必要である。現代作家と密接な関係があるようなので、実際に編み上げているところを動画で撮影し、パソコンなどのモニターを利用して紹介するのも一案だと思う。
 - ポスター：シンプルなデザインでありながら伝えるべき事項がはっきりしていてよい。ただ、見たいという意欲をかきたてているかどうかという点ではやや不十分。写真の加工などもう少し工夫ができないか。
- 図録：展覧会の図録というより、文字と図版の比例・配置が論文のようである。個人の作家から作品を借りたにも関わらず謝辞がないのは致命的。そして内容的には関係性の薄い情報が多い。
- 展示：タイトルからすれば、工芸品がメインだと理解するが、そのメインにたどりつくまでの導入が長く、展示構成に少しバランスが欠けるように思う。

吹田くわいの今と昔—近世から近代、そして現代へ—

- 地元物に着目し、地元団体の協力を得て展示を作り上げたことはすばらしい。技術的な問題として、パネルが汚い、間違いがあるのが残念。間違いには気付いているところと、そうでないところがあった。
- 西尾家文書の名称をキャプションに入れる。くわいを展示で採り上げた理由などがあってもよい。大阪野菜のなかでの位置づけ。
- 吹田くわいが今回の中では比較的テーマが絞られているが、それでも植物分類の話が近代のブースにあるなど、自分たちの分担の問題ではなく、お客さんにどう理解してもらえるかを優先すべき。
解説もダラダラ時間が長くなり、ポイントを絞るということがされてなかった。
- - 伝統野菜をとりあげたことは面白い。吹田くわい、初めて見た。
 - これからの事業提案はどうか？遺産ではなく資産として（自治体への取材）。
 - 調理例を入れないのは何故？
- テーマ設定、展示資料のチョイスは良い。展示（ディスプレイ）はおとなしめだったが、好感がもてる。
Openに間に合わなかったのは論外。
- テーマとしては完結していてよい。コーナーの分け方もわかりやすい。またキャプションの設計もよく、全体を理解しやすい。ただし、一部を除いて文字が多い。
- コーナーの説明がやや長すぎる。しかし、読みやすい。展示の流れもよくわかる。
図録の文字が全てM朝でメリハリがない。
- 地図パネルのしわ。
吹田クワイ（造花）演出できないか。桶沓内部の写真の位置。
くわい（実物）容器は液浸容器とか見やすいものに。
- 図録の写真が小さく文章が多い。

- ・本物と複製が区別なく展示されている。パネルと本物に通し番号は振らない方が良い。
- ・よく調べているがキャプションの説明が長い。文章を続けるより、見出しと小文など見やすい工夫が必要。
- ・図録は図を見せるというより挿絵的。展示はあくまで作品を見せるという姿勢が必要か。
- ポスターが何の写真かよくわかりません。普通のくわいも示した方が吹田くわいの特徴がよりよくわかってもらえたのではないかと思います。
- ・図録：表紙がちょっとさびしい。4点の図の意図は？1行の文字量が多すぎる？（眼を移動させる距離が長く読みづらい。）
- ・どう食べていたのか、も気になる（今と昔で違うのか、など）。
- 前日の段階でもパネルが全くできておらず、明らかに準備計画に問題があった。そのため減点している（パネルが多いという原因もある）。
内容はこれまで吹田市や観光協会、保存会などがまとめている冊子やHP等の情報と全く同様のものであり、何らかの工夫が必要である。
- (図録)【良くない点】①文章が多い。→クワイの種類や大きさは表でまとめられる。②写真の配置が単調。写真が小さくて意味をなしていないものがある。→P.7-12 ③展示物の写真の下に所蔵先が明示されていない。
【良い点】文字の大きさは読みやすかった。
(展示)【良くない点】①パネル・キャプションの始末がよくない。②絵図が小さくてわかりにくい。市外在住者も含めて、わかりやすい工夫をしてほしい。(絵図の概略図の作成、現在の地図を併せて配置)
【良い点】展示タイトル通りの展示。見学者からの指摘をうけて、それに対応し、日々内容を充実させていたのは評価できる。展示で説明できなかった部分については応対・解説によって補おうと工夫していたのはよかった。展示作業でほとんど見なかった人をどのように評価すべきか。
- ・関西大学の立地する吹田市をとりあげたテーマは、多くの観覧者にとってなじみ深く、また吹田くわいをめぐる過去から現代への流れも比較的分かりやすかった。
- ・ただし、案内役の班員に対し、吹田くわいの味を聞いても、実際に食べた班員があまりおらず、また、それぞれの展示資料の舞台となった場所（栽培される田畑、仙洞御料庄屋の西尾家、絵馬の神社等々）を班員に尋ねても、現地に行った班員が少なかった。一般的なくわいと吹田くわいとの実物を並べたり、班員が手持ちしていたファイルにある説明用の写真（吹田くわいが花を咲かせている写真）などを展示パネルとして掲げたり、班員が事前に吹田くわいを調理して食べてみたり、それぞれの展示資料の舞台となった場所を一枚の大きな現在の地図の上にまとめて示したりすることで、観覧者は、吹田くわいをより具体的にイメージすることができるのではないかと思います。
- ・吹田の名産である「吹田くわい」を取り上げ、網羅的に紹介している。図録も歴史的な記述に多くが割かれている。第1章、第2章の本文は、下の方が大きく空白となっているのは残念である。写真撮影は適正になされていると思うが、写真と解説文とのバランスなど、もう少しデザインに工夫がほしかった。

- パネルにシワがあるのは残念であるが、ポスターは上手にデザインされている。手前の配布物で見えにくいいため、置き場所を変えるべきであろう。
- 食べ物なので、どのような味がしているのか、食感はどうなのか、どうしたら食べることができるのか（入手できるのか）、といったことの説明があってもよかったかもしれない。
- ポスター：必要事項ははっきりと目立っているので良い。
- 図録：形式は比較的整っている。中身も充実している。欠点としては表紙と裏表紙に使っている画像のクレジットがない。ポスターともリンクしていない点では評価が下がる。
- 展示：パネルのゆがみや文字の大きさなどは多少問題があるが、充実した展示だと思う。動線がはっきり示されていて良かったと思う。

総 評

- 全般を通じてサボる人を防ぐためにブースを分けて分担割当をしているため、かえって展示に統一感がなくなっている。初日の時点で展示が完成していない班もあり、キャプションの文字の大きさや文字の配置が揃っていなかった。期間中に修正されたところもあるが、まだ解説文に推敲不足の箇所が残っている。事前の十分な意見調整や打ち合わせ、早目に展示作業を終って、全員で展示チェックと解説内容の打ち合わせが必要ははずだが、どの班もできていなかった。
- 授業の構成の問題ですが、「展示構成・図録作成」のコマをスケジュール管理重視の内容にした方がよいように思います。昨年、本年度と「展示会を作り上げるとは…」という内容にしましたが、「スケジュール管理の重要性」という内容にシフトすべきかと思っています。
- 全体にハンズ・オンな動きがない。図書館の展示か。
- • 学外の機関、個人に多くの資料を借用されていたのはよかったです。
- 図録の最終的な統一校正（フォント、行間 etc）ができておらず、バラバラで見にくいです。
- 〈全体に関して〉
全体として低調な展示会となってしまった。
各班の構成員は増えているはずであるが、準備の最終日であっても班員がそろっておらず、皆で展示を完成させようとする姿勢がどの班にも見られず残念であった。実際にくわい班ではパネルが全くできておらず、メ切に間に合っていなかった（各担当は決めているが、展示作業は全員で行なうものであることまでも話すべきなのか）。
展示パネル 改善みられた。
ポスター○ デザイン良い
図録△ 写真文字バランス悪い×、配色と文字の色味×、字体見にくい×
レプリカ・参考資料の表記必要
- ①立ち振る舞いに気をつけて欲しい。
 - 事務室でのやりとりを聞いていると、自分たちの希望のみを言って事務室の都合を全く気にもしない。
 - 道具を借りる時に帳簿に記入しない。

- 道具をぞんざいに扱う。
 - 展示物の上で作業をする。
- ②あいまいな質問をしない。
-
- 3つの班のいずれもが、一定のストーリー性・流れを有する展示を作り上げていたと感じた。
 - 学生による口頭での解説は、各班によって、また、同じ班でも担当者によって、知識や理解のレベル、熱意などにバラツキがみられた。なかには、一部の班員が自らの担当範囲や担当時間のみに関心を寄せる様子もうかがえた。
 - 班員（学芸員）による口頭での解説は、資料・パネルや図録とともに展示を構成する重要な一部である。それゆえ、展示の全体に関する知識や開催期間中に得た情報などを班員の間でこまめに共有・フィードバックしつつ、説明の方法や運営の方針を修正・統一することで、観覧者にとっては、よりわかりやすい展示となり、いっそう満足度が高まるものと思われた。